

## 人麻呂作歌の表記をめぐって其三

古屋 彰

### 十一

卷二挽歌部所収の柿本朝臣人麻呂妻死之後泣血哀慟作歌にあつて、或本歌が人麻呂歌集に出たとして不思議を感じさせない表記のありようを示した。このことは、別途に出た本文歌が存在しそれに対して人麻呂歌集が参考に供された、という図式を暗示するように思われた。ところが、同じく卷二挽歌部所収の明日香皇女木飴殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌もまた、人麻呂歌集寄りの表記のありようを示すのである。この場合は或本歌としてではないから、いはば泣血哀慟歌における本文歌と同列に位置するように見える。しかし、考えてみれば、別途に出た本文歌というべきものが存在しないで人麻呂歌集に拠つて新たな歌をとり来る場合には、或本歌の扱いを受けなくて当然であろう。明日香皇女木飴殯宮之時作歌に薨去時期の検注が付されていないことをもって、その前後に並ぶ人麻呂の日並皇子尊殯宮之時作歌や献泊瀬部皇女忍坂部皇子歌や高市皇子尊城上殯宮之時作歌などに遅れて補入されたのではないか、またそのことが高市皇子尊城上殯宮之時作歌の前に位置することになってしまった問題とからむかもしれないことを、前節で述べた。

日並皇子尊・皇子川嶋・高市皇子尊のそれぞれの薨去の時の検注をみると、

(1) 右日本紀曰 三年己丑夏四月癸未朔乙未薨

- (2) …… 日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大參皇子川嶋薨
- (3) …… 案日本紀云 十年丙申秋七月辛丑朔庚戌後皇子尊薨

とある。日本紀の記述と照らし合わせてみると、(1)では「皇太子草壁皇子尊」の名が略され、逆に(2)では「朱鳥」の年号が加えられている。これらを一連の作業として見る時、三年と十年の中間に位置する五年にだけ「朱鳥」の年号が加えてあることに、やや不審が残ると言える。<sup>(1)</sup>しかしそれはひとまず措くとして、今一つの明日香皇女木甕殯宮之時作歌の位置をめぐる問題の方であるが、この歌が後の補入であることにのみその理由が求められてよいのであろうか。

柿本朝臣人麻呂獻泊瀬部皇女忍坂部皇子歌一首 并短歌

飛鳥 明日香乃河之 上瀬尔 生玉藻者 下瀬尔 流觸経 玉藻成 彼依此依 靡相之 婦乃命乃 多田名附

柔膚尚乎 劔刀 於身副不寐者 烏玉乃 夜床母荒良無 一云阿礼奈牟 所虚故 名具鮫兼天 氣田敷藻 相屋常念而 一云公毛

登相哉 玉垂乃 越能大野之 旦露尔 玉裳者泥打 夕霧尔 衣者沾而 草枕 旅宿鴨為留 不相君故(2一九四)

反歌一首

敷妙乃 袖易之君 玉垂之 越野過去 亦毛将相八方 一云乎知野尔過奴(一九五)

右或本曰 葬河嶋皇子越智野之時 獻泊瀬部皇女歌也 日本紀云 朱鳥五年辛卯秋九月己巳朔丁丑淨大

參皇子川嶋薨

右は、題詞と左注とで、説くところがいささか異なっている。長歌の「そこ故に」以下の後段から反歌にかけては、左注に引く「葬河嶋皇子越智野之時 獻泊瀬部皇女歌也」で理解が容易であるが、これをもって前段までも統一的に理解しようとする、いろいろ無理が生じてくる。前段は、そこをすなおに読む限り死者は女性であり、生前明日香

川と何らかのゆかりをもっていた女性の死がうたわれていると解すべきであろう。しばしば指摘されてきたように、本歌の「飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻は 下つ瀬に 流れ触らばふ ……」のうたいだしと次歌の明日香皇女木嶋殯宮之時作歌の「飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 石橋渡し 下つ瀬に 打橋渡す ……」のうたいだしとはきわめて相似た表現となっており、明日香皇女木嶋殯宮之時作歌の長歌の末尾部分に「御名にかかせる 明日香川」とあり短歌に「明日香川 明日だに見むと 思へやも 我が大君の 御名忘れせぬ」とうたわれている。このことを思えば、本歌の前段に描かれる女性もまた、明日香皇女その人であろうとみるのが自然である。本歌の題詞はたしかに類例を見ないものであり、本歌がここに置かれたのは、左注に引く或本の記事に沿って朱鳥五年が検注されたことに拠っているのであろう。しかし、本歌の題詞をそのまま信ずるとすれば、本歌は、人麻呂が泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献った歌である。さきに夫を失った泊瀬部皇女とおくれて妻を失った忍坂部皇子との姉弟双方への献歌として、この作品を理解することは不可能なのであろうか。

作品論的解釈は私のよく成し得るところではないし、また本論の主題でもない。ただ、明日香皇女木嶋殯宮之時作歌が後に増補されたにせよ、ここに位置するのには、単に誤入というのではない或る必然がそこに内在したのではなかったか。

## 十二

いわゆる献呈挽歌は、題詞によれば泊瀬部皇女と忍坂部皇子とに献った歌であり、左注に引く或本の記事によれば泊瀬部皇女に献った歌となる。人麻呂の皇子たちに献った歌が卷九所収の人麻呂歌集非略体歌に多いことは、周知の事実である。また、卷三雑歌部に収められた「柿本朝臣人麻呂獻新田部皇子歌一首<sup>并短歌</sup>」(二六一・二六二)が人麻呂歌集寄りの表記傾向を示すことについても、先に触れた。身崎寿氏が、「むろんこれは用字法等の詳細な検討を経なけ

れば確定できないことであるが」と但し書きを付した上でこの献呈挽歌が人麻呂歌集からとりきたったものではないかとされたのは、<sup>(2)</sup> 情況からみてもっともな問題提起と言えよう。

しかしながら、献呈挽歌の助詞・助動詞の表記のありようを見る限り、人麻呂歌集のそれとはほど遠い。助詞・助動詞で無表記のものは、

飛鳥ノ（一九四）

の一例だけで、強いて求めれば、他に

所虚故ニ（一九四）

の一例を追加することが出来る程度である。助詞「て」「は」「ば」は七例すべて文字化されていてその表記率は一〇〇%、助詞「の」「が」では三例が助字で書かれ七例が仮名で書かれていて仮名表記率は七〇%である。この限りでは、人麻呂歌集との関連を考える余地は全くない。ただ用字法の上からは、人麻呂歌集寄りかと思われるものを多少指摘することができる。

献呈挽歌では、二度現れる地名「をち」が

越能大野之（一九四）

越野過去（一九五）

と「越」一字で記されている。「越」は、入声音の韻尾を切り捨てずに二音節仮名としたもので、この種の仮名が人麻呂歌集歌に多く見られることは、本稿の第三節ですでに触れた。その際、「をち」が地名であることから、注記の中でとり挙げることはしなかった。しかし、左注に「越智」と二字表記になっていることでもあり、

越方人迹（10二〇一四、非略体歌）

の「越」などと共に、人麻呂歌集的用字としてよいのかもしれない。

つぎに、献呈挽歌に

於身副不寐者（一九四）

とある助詞「に」に宛てた助字〈於〉は、卷十を中心に四十例近くあるが、人麻呂関係歌内では、他に

河瀬於踏（10二〇一八、非略体歌）

於妹不相為（12二八五七、略体歌）

の二例があつて、どちらかと言えば、歌集寄りの用字とすべきなのかもしれない。

いま一つ、献呈挽歌中に

所虚故（一九四）

と出る音仮名〈虚〉と〈所〉は、万葉集にあつてきわめて用例の少ない特殊字母である。〈虚〉の仮名は、他に

虚知期知尔（2二二三、人麻呂作歌（或本））

の一例だけで、人麻呂歌集に出たとしてそれほど不思議を感じさせない表記のありようを示すとした、あの妻死之後泣血哀慟の作品二の或本歌中のものである。また、〈所〉の仮名は、他に

一云 所已乎之毛（2一九六、人麻呂作歌）

曾許念尔 胸已所痛（3四六六、大伴家持）

所許尔念久（9一七四〇、虫麻呂歌集）

余所留跡序云（13三三〇五、――）

の四例が見られ、その中第二例は変字法によるもの、第三例も少し離れて前に出る〈曾已良久尔〉に対する変字法的用字の可能性のあるものである。人麻呂作歌の一例は、かなり人麻呂歌集寄りの表記のあり方を示すとした、あの明日香皇女木嶋殯宮之時作歌中のものである。従つて、〈所虚故〉の用字にも、人麻呂歌集歌とのかかわりを予測させる

ものが皆無とは言えないのである。

いわゆる献呈挽歌が、いま見るそのままの姿で人麻呂歌集に存在したとは、とうてい考えることができない。しかし一方で、歌集寄りの用字かと見られるものが二三まじること、認めなければならぬ。もしも献呈挽歌が人麻呂歌集に載せられていたのであったなら、人麻呂歌集での在り方が、明日香皇女木飴殯宮之時作歌の卷二挽歌部におけるあの位置を決定づける要因をなしたかもしれない可能性だけは頭の片隅に残して置くべきであろう。

全くの偽書でもない限り、人麻呂の名を冠した歌集の中には、それと察せられる形で人麻呂自身の手になる作品が少なからず収められていたと考えられる。卷九冒頭近くに位置する、簡単な題詞を付した一群の人麻呂歌集所出歌を見ても、そのことは首肯されよう。従って、万葉集編纂のいずれかの段階で、人麻呂歌集から人麻呂のうたが人麻呂作としてとり込まれる蓋然性は高かったとしなければならない。ただ、別途に出た人麻呂作歌がすでに収録された後に人麻呂歌集が参考に供されたのであったなら、そこから新たに万葉集にとり込まれた人麻呂作歌はそれほど多くなかった可能性も充分に考えられる。また、万葉集の編纂過程は複雑であるから、人麻呂歌集が参考に供されたのも一度だけと限定すべきでないかもしれない。そうすると、時により人により、そのとり込み方が一様でなかった場合を想定しなければならなくなる。つまり、つねに原表記にきわめて近い形でとり込まれるとは限らないのである。

### 十三

人麻呂作歌の中に人麻呂歌集から直接とり来ったものがどれほどまじるのか、確たることはわからない。文字表記を中心として或は人麻呂歌集から直接とり込まれたかと疑われる歌を除いてゆくと、人麻呂作歌の表記のありようは、だんだんに人麻呂歌集のそれとの距離をひろげてゆく。ということは、逆に、人麻呂作歌の表記のありようがそれぞれの巻の他の作歌群のそれに近寄ることをも意味している。人麻呂作歌の表記に、編纂・整理者の手の加入を疑っ

てみる必要は全くないのであろうか。

幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌

八隅知之 吾大王之 所聞食 天下尔 國者思毛 澤二雖有 山川之 清河内跡 御心乎 吉野乃國之 花散相  
秋津乃野邊尔 宮柱 太敷座波 百磯城乃 大宮人者 船並豆 旦川渡 舟競 夕河渡 此川乃 絶事奈久 此  
山乃 弥高思良珠 水激 瀧之宮子波 見礼跡不飽可問 (136)

反 歌

雖見飽奴 吉野乃河之 常滑乃 絶事無久 復還見牟 (三七)

安見知之 吾大王 神長柄 神佐備世須登 芳野川 多藝津河内尔 高殿乎 高知座而 上立 國見乎為勢婆  
疊有 青垣山 山神乃 奉御調等 春部者 花挿頭持 秋立者 黄葉頭刺理 一云黄葉  
加射之 逝副 川之神母 大御食尔  
仕奉等 上瀬尔 鵜川乎立 下瀬尔 小網刺渡 山川母 依豆奉流 神乃御代鴨 (三八)

反 歌

山川毛 因而奉流 神長柄 多藝津河内尔 船出為加母 (三九)

右日本紀曰 三年己丑正月天皇幸吉野宮 八月幸吉野宮 四年庚寅二月幸吉野宮 五月幸吉野宮 五年  
辛卯正月幸吉野宮 四月幸吉野宮者 未詳知何月從駕作歌

右は、卷一雜歌部に収められた人麻呂作歌である。日本紀による持統天皇の吉野行幸時の検注が付されているが、  
卷一の場合、この左注のみが「朱鳥」の年号を欠いている。前後三箇年にわたる記事故に、煩雑さを避けて省略に従っ  
たのであろうか。

まず、助詞「て」「は」「ば」の表記について見る。本歌では、助詞・助動詞の無表記例が

春部二者（三八）

の一例だけで従って助詞「て」「は」「ば」はすべて文字化されているのだが、その中に

船並豆。（三六）

依弓奉流。（三八）

瀧之宮子波。（三六）

太敷座波。（三六）

といった、正訓字や訓仮名に接して用いられた音仮名表記例がまじっている。

國見乎為勢婆<sup>△</sup>。（三八）

の〈勢〉の文字は伝冷泉為頼筆の一本にだけ存在するのであり、他の諸本に従ってこの文字を本来無かったものとすれば、正訓字に接した音仮名表記例としてさらに一例が加わることになる。正訓字主体表記諸巻における助詞「て」

「は」「ば」の表記の実態についてはすでに前稿で述べたが、正訓字や訓仮名に接した音仮名表記例は

「て」 一四例（二一・九％）

「は」 八〇例（四四・二％）

「ば」 一九例（二〇・二％）

と「て」「ば」で少なく、その用例は有名歌巻にかたよる傾向が見られた。特に「ば」の場合、十九例中の十四例までが巻十九に現れるのであって、新しい表記の様相を示すものと判断される。

つぎに、正訓字活用語の語尾を書き添えた

見礼。跡不飽可問（三六）

絶事無久（三七）



をとりあげる。

第一例は、上一段動詞の已然形「みれ」の語尾を書き添えたものである。人麻呂関係歌では、右の一例を除いて、他は

見者悲毛（1二九、作歌）

或云 見者左夫思母（1二九、作歌）

雖見飽奴（1三七、作歌）

雖見不駄（2一九六、作歌）

猶預不定見者（2一九六、作歌）

使乎見者（2二〇九、作歌）

吾屋乎見者（2二一六、作歌（或本））

見者不怜毛（2二一八、作歌）

雖見不飽（2二二〇、作歌）

奥見者（2二二〇、作歌）

邊見者（2二二〇、作歌）

廬作而見者（2二二〇、作歌）

仰而雖見（3二三九、作歌）

鳴門乎見者（3三〇四、作歌）

雖見不飽有武（4四九九、作歌）

雖見不飽（7一三〇五 略体歌）

激乎見者（9一六八五、非略体歌）

雖見不足可聞（9一七一一、或云作歌）

雖見不飽君（9一七二一、非略体歌）

根毛居侶雖見（9一七二三、非略体歌）

雖見不飽鴨（9一七二五、非略体歌）

見者悲裳（9一七九六、非略体歌）

見佐府下（9一七九八、非略体歌）

見者苦弥（10二〇〇六、非略体歌）

靡見者（10二〇一三、非略体歌）

遠見者（11二四〇二、略体歌）

月見（11二四二〇、略体歌）

雖見君（11二五〇二、略体歌）

振酒見者（13三三〇九、非略体歌）

のごとく、すべて語尾を書き添えない例ばかりである。「みれ」のレを書き添えた例は、人麻呂関係歌においてめずらしいというだけでなく、他にこれを求めても

見礼。常不飽香聞（1六五、長皇子）

見礼。杼不飽（3四五九、犬養人上）

貴見礼者（6九三三、山部赤人）

見礼。杼母不飽（19四二一四、大伴家持）

の四例が拾えるのみで、いずれも有名歌巻中のものである。ついでに言えば、先の挙例によってわかるように、人麻呂関係歌において「見れど（も）」のド・ドモはことごとく「雖見」と助字〈雖〉で書かれており、仮名書きは唯一の例外ということになる。もちろん、「みれ」のレを書き添えたことが「ど」を仮名書きにする結果につながっているわけだが、それにしても接続助詞「ど」の訓仮名表記例四十四の中、音仮名に接して用いたものが

見礼跡不飽可問（13六、人麻呂作歌）

見礼常不飽香聞（1六五、長皇子）

の二例のみという点でもまためずらしく、巻一の何か特別な状況を反映しての用字とも見られそうである。

第二例は、ク活用形容詞の連用形「なく」の語尾を書き添えたものである。「なく」「なき」「なけれ」とさらにこれに準ずる「なみ」を含めた語尾の書き添えについては本稿第五節ですでにとりあげたので、いまは「なく」に限ってふり返ってみることにする。人麻呂関係歌では、右の一例を除いて

浦者無友（2一三一、作歌）

滷者無軀（2一三一、作歌）

浦者雖無（2一三八、作歌（或本））

滷者雖無（2一三八、作歌（或本））

絶事無（7一一〇〇、非略体歌）

故無（11二四一三、略体歌）

無鴨（11二四二一、略体歌）

袖乾日無（12二八四九、略体歌）

恙無（13三二五三、非略体歌）

と語尾を書き添えないのを原則としている。「なく」のクを書き添えた例は、人麻呂関係歌においてめずらしいというだけでなく、他にこれを求めても

息事無久。(1七九、作主未詳)

吾毛事無久。(4五三四、安貴王)

忘日無久。(4六四七、坂上郎女)

無間苦思念者。(4七〇二、河内百枝娘子)

止時毛無久。(12二九二、――)

の五例が拾えるのみで、有名歌巻にかたよっている。<sup>(4)</sup>

つづいて、自立語を仮名書きした

絶事奈久。(三六)

弥高思良珠。(三六)

をとりあげる。

第一例は、ク活用形容詞の連用形「なく」の全体を仮名書きしたものである。先にとりあげた語尾の書き添え例よりも一段と仮名化の進んだものと言うことができ、人麻呂関係歌中の孤例であることもちろんである。他にこれを求めると、

跡毛奈久。(8一六一三、賀茂女王)

絶已等奈久。(19四一五七、大伴家持)

常毛奈久。(19四一六〇、大伴家持)

弥奴比等吉奈久。(19四二二一、坂上郎女)

絶事奈久。(19四二六六、大伴家持)

と有名歌巻とりわけ巻十九に集中的に現れ、<sup>(5)</sup>新しい表記の様相を示すものと判断される。しかも、本歌のように正訓字に接しての仮名書きは、四二六六番の大伴家持作歌の一例だけというめずらしいものである。

第二例は、「たかしらす」の接頭語部分を除いた「しらす」を仮名書きしたものである。「(たか)しらす」の語は人麻呂関係歌では作歌にのみ見られ、右の一例を除いては

所知食之乎(1二九)

所知食兼(1二九)

所知食登(2一六七)

所知行(2一六七)

所知食世者(2一六七)

天所知流(2二〇〇)

と、そのことごとくが〈所知〉と正訓字表記されている。<sup>(6)</sup>他に求めても仮名書き例は見当らず、巻十九にあっても

所知来流(四二五四、大伴家持)

國所知等(四二六六、大伴家持)

國所知牟等(四二七四、石川年足)

と〈所知〉で記されている。巻十九以上に仮名化の進んだ表記の様相を示していると言うべきであろうか。ついでに言えば、〈珠〉の仮名も珍しく、他に

波太須、珠寸(8一六三七、太上天皇(元正))

のごとく変字法で用いられた一例と、

珠洲能字美尔 (17四〇二九、大伴家持)  
 珠洲乃安麻能 (18四一〇一、大伴家持)

の地名表記例とだけがある。

いま一つ、助詞「かも」を音仮名二字を用いて書いた

見礼跡不飽可問 (三六)

船出為加母 (三九)

をとりあげる。人麻呂関係歌に限っても、他に

今日毛可母 (1四一、作歌)

一云 念香毛 (2一九八、作歌)

廳可毛 (2一九九、作歌)

奈世流君香聞 (2二二二、作歌)

吾於富吉美可聞 (3二三九、作歌)

雖見不足可聞 (9一七一、或云作歌)

の六例<sup>(8)</sup> (第一例と第五例は音仮名に下接しての用例) があって、必ずしもめずらしいものとはいえない。人麻呂関係歌における助詞「かも」の表記の全体を見渡すと、

哉	(無)	
4	3	略体歌
		非略体歌
		作歌

音仮名二 字表記	鴨	27	21	8	1 11
-------------	---	----	----	---	------

の如く、二音節訓仮名〈鴨〉が断然他を圧している。助字〈哉〉は当初「や」「か」両系の助詞との対応が見られるが、二音節訓仮名〈鴨〉によって助詞「かも」の表語性が確保されるにつれて助字〈哉〉は「か」系助詞を離れ、もっぱら「や」系助詞の表記をになうようになり、「やも」は〈八方(面)〉で「や」は〈哉〉でそれぞれ機能分担がはかられて行く。人麻呂の時期は〈鴨〉の文字が助詞「かも」の表語性を獲得してゆく時期であろうから、人麻呂関係歌における〈鴨〉字の多用は尤なことであり、それらの中には

忌之伎鴨。(2一九九、作歌)

吾乎鴨。(2二二三、作歌)

著點等鴨。(7一二七二、非略体歌)

後戀牟鴨。(11二四四九、非略体歌)

多頭ふ思鴨。(11二四九〇、非略体歌)

のような一字一音の音仮名に下接した用例までが現れる。人麻呂にあって、助詞「かも」を音仮名二字で書かねばならぬ必然は考えにくい。もちろん、助詞「か」を音仮名で書いたりするのであるから、それとの混同で助詞「かも」をつい音仮名二字で書いてしまったといったことは全く考え得ないことではない。しかし、卷一所収の人麻呂作歌においてのみ、〈鴨〉が

神乃御代鴨。(三八)

の一例だけで音仮名二字書きが三例とこれを上回るといいうのも不思議であり、このことは巻一全体の傾向に添うものでもある。巻一の人麻呂作歌を除く部分について言えば、〈鴨〉は

相見鶴鴨（八一、長田王）

の一例だけで、音仮名二字をつらねたものが五例とこれを上回っている。ちなみに、この巻一の場合に最も近いのが巻十九である。巻十九にはどうしたとか助字〈哉〉によるものが

留得哉（四二二四、藤原皇后）

と一例まじるが、<sup>(10)</sup>他はすべて音仮名二字で書かれたものばかり（十八例）であって、二音節訓仮名〈鴨〉は完全に姿を消している。ここにもまた、新しい表記の様相がほの見えるのである。

## 十四

扱て、本稿は、

人麻呂歌集略体歌から非略体歌への飛躍は、助詞表記の数値のみ見ればまさに想像を超えるものがありながら、一人の書き手の内部変化として全く理解できないことではない。むしろ、音仮名をとり込むことにふみ切つてしまった後の、非略体歌と作歌の数値の開きをこそ、問題視しなければならない。（第一節）

として、作法的に、非略体歌の内部を巻九所収のものとしてそれ以外に、また人麻呂作歌の内部を巻一・二所収のものとして巻三・四所収のものとして二分して考えるところから出発した。その際、巻一・二人麻呂作歌の助詞「の」「が」における仮名表記率がやや低いことに懸念を表明し、

巻一・二人麻呂作歌の仮名使用率が低いのは主として巻二側に原因があり、そのことについてはのちのち触れることになろう。（第二節）





のようになる。歌群の単位を小さく限ったことによって頻度数が小さくなり、その結果比率の数値が微妙にゆれ動くであろうことを前提にした上で敢て言えば、

- (1) ㊦㊧両作品における仮名表記率はいちじるしく低く、人麻呂歌集略体歌の二五・〇％にほぼ匹敵する。
- (2) ㊦㊧両作品を除いてもなお巻二人麻呂作歌の仮名表記率はやや低目であるが、人麻呂作歌を除く部分と同率であることが注意される。

- (3) 巻一人麻呂作歌だけに限れば仮名表記率は高い数値を示し、巻九非略体歌の五三・一％や巻三・四人麻呂作歌の五二・二％を凌ぐことになる。

- (4) 人麻呂作歌を除く巻一の仮名表記率はいちじるしく高く、巻十九の六一・五％をさらに大きく上回る。といったことどもが指摘される。

巻一所収の人麻呂作歌中いくつかの点で巻十九的表記の様相を示した幸于吉野宮之時作歌において、助詞「の」「が」は六例が助字「へ之」で書かれ九例が音仮名「へ乃」で書かれているから、仮名表記率は六〇・〇％と高い。巻十九のそれに近いとも言えるし、巻一全体の傾向に添うものであるとも言える。「幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌」の表記に對して、人麻呂自身の或る特別な意図が働いた結果と見るよりも、巻一全体の表記傾向に添って把握する方が穏かなのではなからうか。

ところで、助詞「の」「が」の仮名表記化が巻一で進み巻二でおくれ人麻呂作歌がまたそれぞれの巻全体の傾向にほぼ添っている、という情況の中で、やや気になることがある。それは、巻二挽歌部所収のいわゆる献呈挽歌において助詞「の」「が」の仮名表記率が七〇・〇％と高い数値を示したことである（第十二節、参照）。頻度数そのものが助字三例仮名七例と低いのであるから、七〇・〇％という数値にそれほどこだわらるべきでないかもしれない。ただ、先に

指摘したように、献呈挽歌の左注にのみ「朱鳥五年」と年号が付されていたことと併せて卷一的とも言えることが、やや気になるのである。

幸于吉野宮之時作歌に關連する文字として、最後に〈長柄〉に触れておきたい。「かむながら」の語をも含めて助詞「ながら」の正訓字表記と見られるものは、

神隨（2一六七、人麻呂作歌）

皇子隨（2一九九、人麻呂作歌）

神隨（2一九九、人麻呂作歌）

神隨（2一九九、人麻呂作歌）

神隨（2二〇四、置始東人）

神隨（6九三八、山部赤人）

君之隨（6一〇五〇、福麻呂歌集）

神在隨（13三二五三、非略体歌）

山隨（13三三三二、――）

海隨（13三三三二、――）

のごとくに現れる。これに対して、二字熟した訓仮名〈長柄〉を宛てたものが、

神長柄（1三八、人麻呂作歌）

神長柄（1三九、人麻呂作歌）

神長柄（1四五、人麻呂作歌）

神長柄（1五〇、（藤原宮之役民））

妻常言長柄。(9一六七九、或云坂上人長)

のごとくに現れる。<sup>(11)</sup> 後者の用例が巻一に集中するところから、巻一的用字のようにも見受けられる。また、巻九の或云坂上人長作歌は「右柿本朝臣人麻呂之歌集所出」(一七〇九左)の範囲内に含める見方もあり、<sup>(12)</sup> その当否の検討は今は惜くとして、

城國尔 不止将往来 妻社 妻依来西尼 妻常言長柄(一六七九)

の一首には、「かよふ」に宛てた熟字〈往来〉(第八節参照)やネの音仮名〈尼〉に人麻呂用字法に通ずるところがあるから、〈長柄〉が人麻呂自身の一時期の用字であるようにも見受けられる。

この段階での私見は無いし、このこととかならずしも直接からむわけではないが、巻一人麻呂作歌の用字の検討に際しては、

(一) 原筆録者の用字

(二) 編纂整理者の用字

の他に、この両者の中間に介在する

(三) 伝写者の用字

の可能性をも視野に置くべきであるかもしれない。

## 注

(1) 巻一における検注では、逆に、「幸于吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌」の場合を除いてすべて「朱鳥」の年号が付されているが、このことに関して後に触れる。

(2) 身崎寿「柿本人麻呂献呈挽歌」(『万葉集を学ぶ 第二集』(昭52・12、有斐閣))

(3) 古屋彰「万葉集正訓字主体表記における助詞の表記の推移について」(『金沢大学文学部論集文学科篇』8、昭63・2)

- (4) 無名歌巻中の唯一の例の出る二九二一番歌には、坂上郎女的用字と指摘されている〈幼婦〉が現れる。
- (5) 第四例の坂上郎女歌は巻十九に所在するとはいっても、歌全体が仮名書きされている。
- (6) 「高市皇子尊城上殯宮之時柿本朝臣人麻呂作歌一首<sup>并短歌</sup>」の「或書反歌一首」中の

高日所知奴(2二〇二)

の一例は含めなかった。

- (7) 卷十七の四〇二九番歌の題詞にも「珠洲郡」とあつて、地名表記として固定化したものであろう。

- (8) 題詞の下に「柿本朝臣人麻呂歌集中出也」の注記をもつ「大寶元年辛丑幸于紀伊國時見結松歌一首」中の  
又將見香聞(2一四六)

と、「長皇子遊獵路池之時柿本朝臣人麻呂作歌一首<sup>并短歌</sup>」の「或本反歌一首」中の

海成可聞(3二四一)

と、左注に「右一首或云柿本朝臣人麻呂作」とある「同石田王卒之時山前王哀傷作歌一首」中の  
外尔可聞見牟(3四二三)

の三例は含めなかった。

- (9) 何然毛(2一九六、作歌)

の例は省いた。無名歌二九四七に付された

柿本朝臣人麻呂歌集云 …… 人見鴨

の例も省いた。また、略体歌二三六九に付された

或本歌云 …… 暁来鴨

と、同じく略体歌二八六一に付された

或本歌曰 …… 戀渡鴨

の二例は含めなかった。

- (10) 藤原皇后歌は左注に「…… 十月五日河邊朝臣東人傳誦云尔」とあるもので、或は伝誦歌であることとこの用字はからむのかもしれない。

- (11) これらの他に、

一云 …… 婦云長良(9一六七九、或云坂上人長)

角附奈我良(16三八八四、(越中国歌))

宇礼之備奈我良。(19四一五四、大伴家持)

神奈我良。(19四二五四、大伴家持)

神奈我良。(19四二六六、大伴家持)

の仮名書き例がある。また、熟字〈長柄〉には

長柄之宮尔。(6九二八、笠金村)

長柄郡。(20四三五九左、(上総国防人歌))

と地名表記に用いた例がある。

- (12) 佐竹昭広「人麻呂歌集の歌二首」(『文学』昭22・8)、伊藤博「万葉集における「古」と「今」——卷九の構造論を通して——」(『国語と国文学』昭46・12)、原田貞義「歌巻の落穂——万葉集卷九の形成——」(『国語国文研究』72、昭59・8)など。